考えさせてくれる文献にコミックなんてどうだろう？

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

三者火宅の譬えから

恥も外見もなく、前回、私と私の父親との関係や、私と私の息子との関係について述べた。ありふれた家庭の、ありふれた中年の、実にありふれた話だと思っただけであれば、幸いである。ただ、変な誤解を生んでしまっていたのならば、それこそ父や息子に申し訳ないので、もう少し、この話をひっぱることとする。

最初に、父との関係について語ろう。

私にとって父は、「ほとんど家にいない人」であった。もちろん、時々帰っては来るけれど、「家にいる時は、日本酒を飲む時間がかなり長い」とか、「静かにタバコを吸っている」だとか、「プロ野球中継、主に巨人戦をみて喜んだり、苛ついたりしている」という印象が強く、同時にそれらは、私との接点の乏しさの象徴でもあった。つまり私と父との関係は、決して濃密ではなかったというわけなのであろう。

そんな、私と父との関係を深めるのに役立ったのは、今思うと、漫画（以下、コミック）であったと思う。特に大きな影響を受けたのは、「まんがで学ぶ根本義」とか、「仏教根本義」とか、「まんが法華三部経」などのタイトルであったと思う…が、今とはなってはよくわからない。

と、いうのも、2011年の東日本大震災で実家が一部破損し、その後、建て替えた時に、当該コミックを失ってしまったからである。たぶん、捨ててしまったのだろう。

今回、ネットで調べると、電子書籍に「まんが法華三部経」なるコミックが見つかる（古屋三敏著、ファミリー企画、地人館編集、佼成出版社発行）。これかもしれないが、正直、よくわからない（以下、参照）。

https://www.amazon.co.jp/%E3%81%BE%E3%82%93%E3%81%8C%E6%B3%95%E8%8F%AF%E4%B8%89%E9%83%A8%E7%B5%8C-%E5%8F%A4%E8%B0%B7-%E4%B8%89%E6%95%8F-ebook/dp/B072JC2722/ref=ci_mcx_mr_mp_m_d_scc1_2_1/358-4261394-2001961?pd_rd_w=uBteT&content-id=amzn1.sym.017765a6-d0f3-49d3-87bf-dfba2496c571:amzn1.symc.a24c87a6-6676-4fd8-88d3-366360238e34&pf_rd_p=017765a6-d0f3-49d3-87bf-dfba2496c571&pf_rd_r=YV98HHDJ85X6Q19BGJ22&pd_rd_wg=fSmBd&pd_rd_r=fdc09a2a-1c1c-4bea-8c18-29b8aeb916fe&pd_rd_i=B072JC2722&psc=1

当該コミックを読んだきっかけは、たぶん、母親からすすめられたからだと思う。特に、父親の生き方を知るヒントになる、みたいなことを言われたからだと思う。実は、私の父は敬虔な仏教徒だったのである。もっとも、読むことになったきっかけについて、正確なところを思い出せない。

そんなわけで、小学生の頃の私は、このコミックを手にとった。そして読んで、その内容に愕然とした。というか、怒りというか、不満のような感情をもった。なぜならば、内容がむちゃくちゃだったからである。

当時の私にとって、仏教といえば「お釈迦様が他者を教え救う」とか、あるいは、「世界平和に結びつく、人々の正しい生き方が説明される」といったイメージがあった。しかしそんなイメージと、当該コミックの内容は、合致しなかった。

1つ、例を示そう。

コミックの中に、「三者火宅（さんしゃかたく）」というエピソードが紹介されている。その内容は次のとおりである。

家が火事になっていることに気づかず、子どもたちがその家の中で遊んでいるという状況があった。そして、その子どもたちの父親が、羊、鹿、牛などにひかせた車を用意して、子どもたちの注意をひき、子どもたちを外に導き、無事、子どもたちの命が助かるという物語が繰り広げられた。つまり、親がどうやって子どもたちを安全なところに導くかという、人命救助のお話である。

人の命を救う、まさに大切な教えなのではなるが、当時の私は、むちゃくちゃ違和感を抱いた。なぜならば、父親が用意する車の説明が、やたら長かったからである。とにかく豪華で、魅力的で、丁寧に、車が用意されたのである。すごく時間とお金と労力を費やして用意された車だったと、少なくとも当時の私は、そう、理解したのであった。故に当然、「なにやってんだ父親は？もっと早く、すばやく子どもたちところに駆け込んでいって救えばいいじゃないか」と、感じたのであった。たぶん、「まどろっこしい」とか、「本当に子どもたちを救おうとしたのか甚だ疑問。金持ちの、ピントのずれた救助方法」とすら、思ったのであろう。

そのような印象をもってしまったがために、当該コミックを読んだところで、自分の父親を、より理解することにはならなかった。むしろ、父の人生哲学に、疑問すら感じたのであった。

しかし、このエピソードは、単なる「例え」である。この「例え」がいわんとすることは次のとおりである。

1つは、「火事であることに気づかないこどもに、いくら“逃げろ”といっても、相手が気付かない時には気付かない、気付けない」ということである。つまり、「大切なことをそのまま伝えても、伝わらない時には伝わらない」ということである。

1つは、「伝えたいことをそのまま伝えることにこだわるのではなく、伝わる表現を自在に使い分けねば、相手には伝わらない」ということである。つまり、内容も大事だが、方便

も大事ということである。

そして、この「車」こそ、仏の教えを体現するすごく重要な要素である。一見、「単に子どもの関心をひくもの」である「いろいろな車」は、実は、「とにかく表現、手段を変えて（でも）、相手を救う手続き」を意味しているのである。

このように、よくよく落ち着いて「三者火宅」を読み解くと、「自由自在にスガタ/カタチを変えて、とにかく相手を救う教え」であると、なるほど、すごく納得できるのである。もっとも、私がこの理解に至ったのは二十歳を過ぎてからなので、かなり時間を要したことになる。

そして、長い時間をかけて仏教の中身を消化していくと、私の父がどれほど口数少なくても、どれほど子どもたちと過ごす時間が少なくても、父なりに、家族を大事に思い、大切に、愛しんできたのかが、ほんの少しずつ、見えてきたのである。

一見、理不尽にみえても、ただ単に、不器用だったのかもしれない父。

一見、自分勝手にみえても、ただ単に、気持ちが強すぎただけかもしれない父。

「自由自在にスガタ/カタチを変える/変えられる」大切なことは、逆にいえば、あまりに曖昧で、自由すぎて、不安定で、だからこそ時に、わかりにくかっただけなのかもしれない。

息子にわたすコミック

さてさて、次に、私と、息子との関係について触れよう。

前回、述べた通り、息子は今、とても繊細な時期にある。それがゆえに、私と息子の関係は、特に空回りする。すべては、思うように伝えられない私の責任である。

嗚呼、ここでも気づく。私もまた、自分の父と同じように、うまく方便を扱えていないのである。そして、悩むのである。息子にどう伝えればいいのか、どう語ればいいのか。

だからこそ、いろいろ考えるのである。そもそも私は息子に対して、どんな思いなり、願いをもっているのかと。

息子には、謙虚さや感謝の気持ちを大切にしてほしい。

息子には、努力することの大切さに気づいてほしい。

息子には、自分をもっと肯定してほしい。

私自身の気持ちがもやもやすることも少なくないが、以上の3つが、今の私の、息子に伝えたい思いのような気がする。もちろん他にもいろいろあるが、とにかく最初に伝えたいことは、このようになるだろう。

そして、この思いを言葉にして伝えても、「三者火宅」の物語よろしく、伝わらないのである。息子に“逃げろ”といっても、息子は、火事にある家屋内にとどまったままなのである。

そんな悶々とした毎日の中で、ふと、思い出したのである。私の母親がそうしてくれたように、息子にもコミックを読ませてみよう。もしかしたら、そのコミックの内容から、い

つかどこかで、私の思いが、息子に気づかれるかもしれないと。

高望みはしない。

失敗してもいい。

最終的に「私の思いが伝わらなくても」、それはそれでいい。ただ、息子が自分を大事に思えたり、人生の大切なことを考えてくれれば、それでまったく問題ない。

そういえば、「はだしのゲン¹」であったり、「寄生獣²」であったりと、いろいろなコミックを通じて、人生を生きる意味だとか、命の価値についてだとか、この星の行く末とか、あれこれ考えてきた気がする。そう、私自身もコミックを通じて、色々考えさせられてきたのである。それを今、思い出す。

哲学書、専門書、ハイレベルな学術論文だけが、生きる智慧を示すというわけではないのである。

第4章のコンセプト

さて、毎度毎度のことではあるが、私の身の上話にここまでお付き合いくださり、感謝申し上げます。

今回を皮切りに、以降、コミック（漫画）をモチーフに、対人援助を考えていきたいと思う。やれ専門書だの、最新の論文だのが、必ずしもいつでも最適とは限らないことにも注目していきたい。

そのため、二階堂先生、小幡先生をはじめ、多くの援助者の皆様の経験、知見、お考えをお借りしたい、お力添えしていただきたいと思う。

また、可能ならば、そしてよろしければ、読者からのご意見やご見解も賜りたいと思う。なにかお感じになれることがあれば、いつでもご連絡くださいませ。

—つづく—

¹ 中沢啓治による日本の漫画である。実写映画、アニメ映画、テレビドラマ化もしている。中沢自身の原爆による被爆体験を基にした自伝的な内容といわれている。渡辺は幼少期、この漫画を近所の知人から借りて読み、戦争の恐ろしさを知った。

ちなみにその知人は、ベトナム戦争によって日本に避難した児童を養子縁組していた。それは私の記憶にある、もっとも古い、「戦争のリアルさ、身近さに気付けた」出来事であった。

² 岩明均による日本の漫画。宇宙から飛来した、謎の寄生生物と人類の戦いと共生を描いた作品。

バイオレンスでグロテスクな描写も少なくないのだが、すごく哲学的な内容に、渡辺は衝撃を受けた。